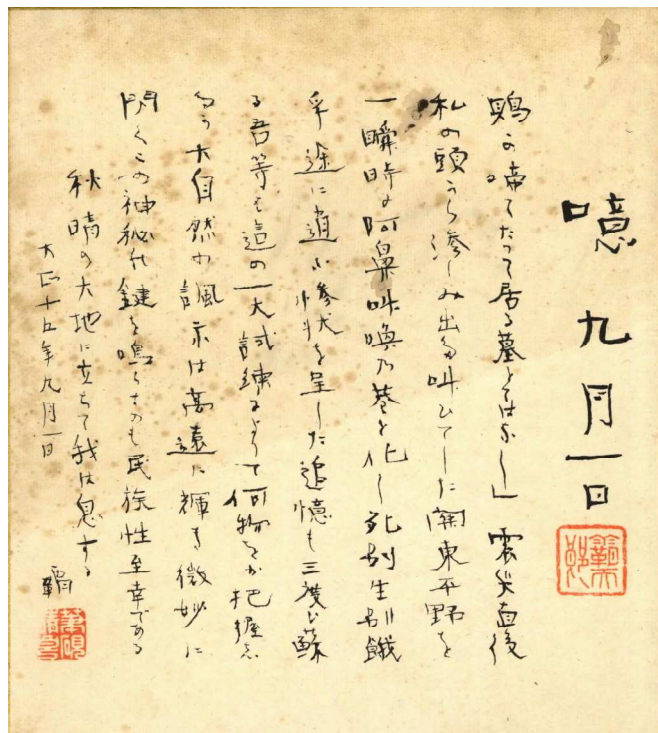




第 24 号

2012年3月30日発行

藤 沢 市 文 書 館
 〒251-0054 藤沢市朝日町12-6
 TEL 0466-24-0171 FAX 0466-24-0172
 藤沢市文書館 検索
<http://www.city.fujisawa.kanagawa.jp/> クリック!



噫 九月一日

賜(もず)が啼(な)くたつて居る墓(はか)としてはなし」
 震災直後、私の頭から滲み出た叫びでした。
 関東平野を一瞬時に阿鼻叫喚(あびきようかん)の巷(ちまた)と化し、死別生別(せいべつせいべつ)、餓(うえ)争(あらそい)途(みち)に道(さまよ)ふ惨状を呈した追憶も三度び蘇る。
 吾等は這(こ)の一大試練によりて何物をか把握したり。大自然の諷示(ふうじ)は高遠に輝き、微妙に閃(ひらめ)くもの、神秘の鍵を鳴らすのも民族性(みんしゅせい)至幸(しきう)である。

秋晴の大地に立ちて我は息する
 大正十五年九月一日 霸(霸天郎)

俳人・永瀬霸天郎の色紙「噫(ああ)九月一日」(廣瀬家文書)とその読み下し文

左上は、藤沢に生きた俳人・永瀬霸天郎(1873～1937)が、関東大震災発生の3年後、大正15(1926)年9月1日に、色紙(ヨコ18.2×タテ21.1cm)に記したものです。永瀬は、本名を登三郎といい、藤沢町坂戸の鉄物商「日の銀」の主人であった一方で、河東碧梧桐(かわひがし・へきごとう)の新傾向俳句(季語や五七五調にとられない俳句)の影響を受け、藤沢町内で発行された俳句雑誌『虎杖(いたどり)』の編集・発行人にもなっています。関東大震災では彼の店舗もつぶれ、この資料のように「阿鼻叫喚の巷」と化した光景を彼自身も目の当たりにしました。それは3年を経過してもなお蘇る追憶として記されていますが、その一方で資料後半の文章および文末の彼の俳句からは、大震災という「一大試練」を経て生き延びることができたことを、ある種の「天の恵み」として霸天郎自身が把握したととらえることもできるかもしれません。(中村)

(永瀬の生涯に関する参考文献：高野 修「俳人永瀬霸天郎考」(『藤沢市文書館紀要1』所収) 1975年)

もくじ

永瀬霸天郎「噫九月一日」…………… 1
 藤沢市史講座「関東大震災と藤沢」… 2

紹介されなかった震災写真…………… 3
 ふじさわ地域史ミニ事典『震災誌』… 4

〈報告〉藤沢市史講座 「関東大震災と藤沢」について

★この講座のねらい

藤沢市で私たちの身の回りに起きた歴史的な巨大地震といえば、1923(大正12)年の関東大震災までさかのぼります。その被害の大きさは、発生した9月1日が「防災の日」となり、その前後1週間を「防災週間」として、各地で大規模な防災訓練が持たれることからもうかがえます。

藤沢市においても、各地に大震災の震災記念碑が建てられており、それらの碑面の中にも震災の悲惨さは記されています。しかしながら、藤沢市域全体として震災の被害がどうであったか、必ずしも正確に伝わっているとは言い難い部分があります。

そこで今年度初めて企画した藤沢市史講座で「関東大震災と藤沢」をテーマとして取り上げ、藤沢および神奈川県での震災の実態を、市内労働会館のホールで講師の先生方に語っていただきました。

★地震のメカニズムと被害の実態

まず第1回目(10月1日)は、中公新書『地震と防災―揺れの解明から耐震設計まで』などを執筆されている武村雅之先生(小堀鐸二研究所副所長)に、「関東大震災と神奈川県―地震のメカニズムと被害の実態」と題してご講演をいただきました。

武村先生は、近年明らかになった記録や最新の研究成果をもとに、江の島などで約1メートルの大規模な隆起があったことや、断層滑りによってマグニチュード7以上の余震が6回あったことなどを紹介しつつ、藤沢で記された仙田四五郎の『震災誌』や、参謀本部陸地測量部が震災直後に作成した「震災地応急測図原図」の調査報告記入部分などを通じて、藤沢の被害実態を紹介されました。特に、国土地理院に現存する「震災地応急測図原図」について、軍用施設の存在で「秘図地域」とされた藤沢およびその周辺も、赤字で被害記録も生々しく記載されている貴重な画像をプロジェクタで紹介されました。

また、東京および神奈川県での被災状況を生存者の証言なども加えてユーモアを交えつつ紹介し、それら震災の被害から、いかなる教訓が学べるのかを、

わかりやすく解説していただきました。その中で、関東大震災ではぎっしりと詰め込まれた家財道具を積んだ大八車の渋滞が火災の類焼を促進したが、これは江戸時代から御触れで禁止されているにもかかわらず、同じ過ちを自動車で繰り返すことがありはしないかという問いかけが、強く印象に残りました。



武村雅之先生のご講演の模様

★震災を記録した人々

第2回目(10月8日)は、松本洋幸先生(横浜開港資料館調査研究員)の「関東大震災を記録した人々―横浜・藤沢を中心に」というご講演をいただきました。

松本先生は、最初に藤沢の震災被害を紹介した後、仙田の『震災誌』などを時系列に再編集し、震災後の藤沢の動向をまとめられました。そして、横浜シネマ商会が震災直後に撮影した無声映画のDVDを上映されました。黒こげの死体や、震災直後の崩落した建物の中を歩く人たちの姿など、非常に生々しく震災の様子を映し出していました。

また、「レンズが捉えた関東大震災」として、当時藤沢駅前にあった神田写真館によってつくられた『藤沢町大震災写真帖』と、写真愛好家でもあった藤沢町内の旧家の家に残された『大震災写真帖』に貼られた写真について紹介しつつ、藤沢でも大震災を写真などで記録化しようとした人々の動きに言及されました。そして、「共通の記憶として継承されていく関東大震災」として、藤沢市域に建てられた震災記念碑などについてご紹介をいただきました。

★震災を生きる子どもたち

第3回目(10月15日)は、伊藤一美先生(藤沢市史編さん委員)から、「震災を生きる子どもたち―時代にみ

る**災害思想の変化**」というご講演をいただきました。

伊藤先生は、最初に「子どもたちの関東大震災」
として震災を体験した子どもたちの作文や、宇佐美
小学校（静岡県伊東市）の児童たちが大震災でどのよ
うに対応したかを紹介した表を紹介されました。次
いで先生は「2011年3月11日午後2時46分の出来事」
とし、東北地方の各地で東日本大震災を体験した子
どもたちの作文を取り上げ、そして3番目に「別れ」
として、東日本大震災で被災した子どもたちが津波
などで失ったものについて語っている文章を紹介さ
れました。その上で、伊藤先生は「子どもたちから
学ぶこと」として、時として「人間の汚い心を見て
しまう」ことがあっても、他の人を「助けてよかつ
たな」と感じ、生まれ育った場所で「今、生きている」
ことへの思いをつづった子どもたちの作文を紹介
されました。

★震災から復旧・復興へ

第4回目（10月22日）は、小風秀雅先生（お茶の水
女子大学大学院教授・（続）藤沢市史編さん委員会委
員長）から、「**震災から復旧・復興へ**」というご講演を
いただきました。

小風先生はまず「震災の被害の特徴」として、当
時の記録類をもとに、藤沢を含む湘南地域や、神奈
川県域の被害を概括されました。そして藤沢地域の
被害の特徴として、震度7という強烈な地震に襲わ
れながら被害が少なかったこと、具体的には建物倒

壊が中心であり、人的被害の比率が小さいこと、火
災被害はほとんどなかったことなどに言及されまし
た。また、震災復興がいち早く着手された要因とし
て、既に東京や横浜では新たな都市計画構想が出さ
れ、組織や専門的人材、計画案などが準備されてい
たことを指摘されました。

次いで「震災復旧の努力」として、震災の翌日か
ら昭和4年4月の小田急江ノ島線開通までの動向を
時系列的に整理されました。また、「震災後の人口
増加」として、1920年代における湘南地方の人口集
中は県内でも最高水準であり、震災後の人口調査で
藤沢町では人口、世帯数ともに増加し、都市化が始
まっていたことが紹介されました。

そして「都市計画の展開」として、湘南地域が震
災復興期において、町村部として全国初の都市計画
法の適用を受けたことが、戦後の湘南地方の都市形
成の原点となったと指摘されました。特に、1930
年代に神奈川県を中心に本格化した湘南海岸の地域
開発では、「理想的遊覧道路」としての湘南遊歩道
の建設、一貫した計画にもとづく県営上水道の付設、
都市計画法を適用した湘南海岸公園建設計画の3本
柱から成り立っていたと強調されました。

最後に、震災復興という事後処理ではなく、既に
構想が出ていた都市計画の中で、湘南地域の復興・
構想を図る計画が進行したことが、関東大震災と藤
沢・湘南地域との関係の大きな特徴である、と結ば
れました。（中村）

紹介されなかった震災写真

以下で紹介する写真2枚は、藤沢駅前にあった神田写真館が大正13（1924）年11月に刊行した『藤沢町大震災写真帖』では紹介されなかったものです。これらの写真は、旧藤沢町の廣瀬藤右衛門家に所蔵されていたアルバム「大震災写真帖」に貼付されていました。



【震災で倒壊した藤沢停車場】

（原品：ヨコ7.2×タテ4.9cm）

神田写真館が発行した『藤沢町大震災写真帖』
に掲載された、震災当日の「午後1時頃」撮影され
た写真とは、撮影位置が異なります。人物も2人し
か確認できませんので、撮影時間は当日の午後1
時頃より前の可能性もあります。

このアルバムには廣瀬家の震災被害と復興の様子を撮した写真も収められていますが、ここでは震災直後に撮影された被害の様子が生々しい写真を紹介します。当時、廣瀬藤右衛門は写真の愛好者として知られ、地元で写真会を開催する名士の一人として『横浜貿易新報』の紙面でも紹介されていました。

廣瀬家の写真帖には、神田写真館発行の写真帖に掲載された写真が多く貼付されていますが、この写真帖でしか見られない写真も一部収められています。震災から約1年後で神田写真館が写真帖を刊行できたのは、写真に関心のある名望家たちが金銭面などで刊行を支援した可能性もあります。その返礼として、紹介されなかったものも含む震災写真が写真館から贈られ、それらがアルバムに残されたと思われます。(中村)

【震災で倒壊した遊行寺の中雀門】

(現品:ヨコ7.3×タテ4.9cm)

神田写真館が発行した『藤沢町大震災写真帖』に掲載された中雀門の写真とは、反対側の位置から撮影されたものです。ちなみに遊行寺では本堂や廻廊など多くの施設が全半壊し、被害の見積もりは当時の金額で百万円以上になりました。



ふじさわ地域史ミニ事典 仙田四五郎編『震災誌』(藤沢小学校発行、大正13年)

関東大震災は、藤沢市域にも大きな被害を与えましたが、関東大震災の発生から1年後の大正13年(1924)9月1日に、当時藤沢小学校で校長をしていた仙田四五郎が編集し、地元の「法政新聞社」の印刷によって発行した記録書が『震災誌』です。

編者の仙田によって、本書は「活きた永遠の歴史の一脚注として」「吾々の生活、即教育の指針たらしめたい」(序文から引用)という意図でつくられました。内容は、旧藤沢町域での被害状況を生々しく紹介する一方で、自警団や在郷軍人会などの諸団体

の動向が掲載されています。また、学校職員や児童たちの文章も数多く収録され、震災の実態を多面的に考えるためのよき素材となっています。

なお本書は、昭和56(1981)年に『藤沢市史資料』第25集「藤沢震災誌」として、市内の震災記念碑の碑文などとともに復刻されています。しかし復刻から30年が経過した現在、東日本大震災の発生を受けて過去の震災被害への関心が高まるなかで、本書はさまざまな視点から、もう一度読み直されてよい資料と思われます。(中村)

お知らせ

連載「古文書の読み方」は、紙面の都合により次号に延期いたします。

編集後記

今年度から始まった「藤沢市史講座」は、東日本大震災の影響を受け、「関東大震災と藤沢」をテーマに開催することになりました。4回にわたったこの講座をご担当された講師の先生方、およびご参加をされた方々に厚くお礼申し上げます。

武村雅之先生は、地震の防災では「一人の百人力より百人の一人力」という言葉で、ご講演を締めく

くられました。地域によっては、大震災をきっかけとして、過去に起きた火災や水害について消防署や地元の郷土史家に聴き取りをしたり、近隣の危険箇所を自分たちで実際に歩いて確認する「防災まち歩き」を行った町内会もあります。近い将来に必ず発生すると言われている大地震に対する備えを、歴史に学ぶことを通じて行いたいものです。(中村)